7月16日　ガラテヤの信徒への手紙6章1～10節
説教題：「“何者か”になりたい」

今日の聖書個所の中心となっているテーマは、私たちの人生の柱となる、「隣人愛」についてであります。それは私たちキリスト者としての信仰の実践であり、イエス様が弟子たちに教えた最も大切な掟である「第一に神様を愛すること」そして「隣人を自分と同じように愛すること」の一つであります。私たちは、他者とのかかわりの中で今を生きています。誰ともかかわらず、一人だけで生きることは、この時代において誰にもできることではありません。それはつまり、私たちの「幸せ」というものも、誰かと共に分かち合うものであり、誰かと共に育んでいくものだと言えるでしょう。

子供が将来の夢を思い描くように、好きなことがあって、それを職業にするという幸せな将来を思い描く、またはお金持ちになって好きなものを好きなだけ買いたいと思う、偉い人になっていろんな人から尊敬されたいと考える、どれもがそれぞれの人が思い描く「幸せを掴みたい」という思いにつながっています。

ただ、私たちが幸せを追い求める時に気を付けなければいけないのが、4～5節で指摘されている「誤った優越感」「自分がひとかどの者である」という自己認識に陥らないようにしなければいけない、ということです。自分が正しい、誰かが間違っている、そう思い込む事は本来背負うべき自分の重荷を捨て去ることを意味します。自分の重荷すら背負わないで、誰かの重荷を共に背負うことはできません。そのような無責任な行いは、必ずや自分に帰って来ることになります。

このように、私たちは「ひとかどの者」となろうとする私たちの心を戒められているのですが、そのように「何物か」になろうとする私たちに対して、モーセの言葉が印象深く響いてきます。出エジプト記3章11節「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」そのように、モーセは自分を「何物でもない」と神様に訴えました。自分はたいそうなものではない、自分はそのようなことをするにはふさわしくない、と訴えるのであります。

しかし、そのようにへりくだるモーセに対して神さまは語り掛けます。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」そのように、私が共にいさえすれば全て大丈夫だ、と神様はモーセに語り掛けました。何ものかである必要はないと、足りない部分は神様が補ってくれると、そのように言ってくれているのです。それが、神様と共に生きるということであり、神様に従って生きるという、私たちが追い求めるべき「何者か」の姿なのだと思います。

いま、私たちは「どう生きるのか」が問われています。自分のために生きるのか、誰かのために生きるのか、それとも神様のために生きるのか。どうすれば神様の言葉に従いながら生きることが出来るのか、そしてそのように生きた結果どのような結果を生むことになるのか、私たちは、それを意識しながら生きていくことが求められているのです。神様にいつも見られている、その緊張感を感じながら、今週一週間の、これからの歩みをともに進めていきましょう。

今日の説教箇所：ガラテヤの信徒への手紙 6 章 1～10 節

- 1：兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、“霊”に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい。互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。実際には何者でもないのに、自分をひとかどの者だと思う人がいるなら、その人は自分自身を欺いています。各自で、自分の行いを吟味してみなさい。そうすれば、自分に対してだけは誇れるとしても、他人に対しては誇ることができないでしょう。めいめいが、自分の重荷を担うべきです。
- 6：御言葉を教えてもらう人は、教えてくれる人と持ち物をすべて分かち合いなさい。思い違いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。たゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります。ですから、今、時のある間に、すべての人に対して、特に信仰によって家族になった人々に対して、善を行いましょう。